



Friendship & Exchange

SCOTLAND GAZETTE Vol.14



スコットランドの風

'Gaoth bho Alba' NPO法人 日本スコットランド交流協会ニュースレター 発行責任者：関 妙子 2020.4.10発行



目次

年次総会のお知らせ	1
Scotland DAY in Tokyo 2020	2
高岡望氏を領事館にお訪ねして	4
JSA高校生英語研修トンボ学生服奨学金開始 帰朝報告会及びYear-End Party	
Bruce 卿のBroomhall House 訪問	5
The Queen's Anniversary PrizesのReception 「日英共同プロジェクト：認知症Conference」	6 7
A new age of exploration Japan Series 2020 なないろ駅伝について	8
Scotland からの来訪者たち 英国歌曲展に行ってきました！	
支部活動報告	10
新会員紹介	12
JSAタータンのスカーフ販売のお知らせ University of Stirling夏期英語研修	



2020年JSA^{NPO法人}日本スコットランド交流協会 年次総会のお知らせ

本年度もNPO法人日本スコットランド交流協会の総会を5月22日に英国大使館ニューホールで開催する準備を進めておりましたが、現在の新型コロナウイルスの感染拡大という現状を考慮して、限られた空間での集会を行うことは不適切と考えるに至りました。結果として、今回は書面での総会という形式をとらせていただくことになりました。4月下旬か5月上旬にはお手元に総会資料をお届けする予定でございます。返信などのご協力をいただくこととなりますが、何卒宜しくお願い申し上げます。なお、現在の状況が落ち着き、皆様を楽しめるような時期が参りましたら、大使館での懇親会を開催し、会員の皆様が親しく歓談する場を持ちたいと思っておりますので、楽しみにお待ちしております。

SCOTLAND DAY in Tokyo 2020

2020年2月1日(土) 神保町にある学士会館で開催いたしました。今回はバーズナイトも取り入れ、多くの方々にご参加いただき大変にぎやかなEVENTとなりました。

■ 第1部 留学フェア

この度新しく、トークセッション形式で留学フェアを進めていきました。エディンバラ大学・スターリング大学・グラスゴー大学で修士課程を修了した留学経験者から、現地での生活の様子だけでなく、大学への出願方法や授業料・生活費について等、詳しいお話を会場のお客様にもお話し出来、有意義な情報をお伝え出来たことと思います。また、会場には高校生のグループやスターリング大学の英語研修に興味を持たれた方が、JSAが用意していた各大学のパンフレットを持ち帰られる姿もありました。年々、スコットランドの大学や留学への興味が大きくなっていることが実感でき、嬉しいひと時となりました。

留学経験者による発表



開会の辞(飯村理事)



古川俊治先生

■ 第2部 特別講演

創立以来JSA顧問として協会を支えて下さっている参議院議員の古川俊治先生のSpeech で始まりました。現在の揺れ動く英国事情に触れられ、日本とScotlandの文化・教育の交流を益々図っていくことの大切さを話されました。

引き続き、上原尚也氏による「人気のタータンとケルト・スプーン」の講演に移り、長年ロイヤル社のタータンを小売ネットで取り扱っている経験から、各タータンが表す意味について解説、さらに英国王室と深い関係を持つタータンを取り上げ、エリザベス女王在位50周年、60周年を記念して制作されたタータン、故ダイアナ妃を偲んでのタータンなどをスクリーンで紹介されました。

何気なく目にしてきたタータンの標榜する意味を知る良い機会となりました。もちろんJSAのタータンのネクタイの紹介もいただきました。

その後、竹鶴孝太郎氏が「日本のウイスキー／ジャパニーズウイスキー」の講演をされました。ニッカウヰスキーの創始者竹鶴正孝氏の孫である竹鶴孝太郎さんは、現在の日本産のウイスキーの価格の高騰、品薄状態の原因を解き明かし、さらに正孝氏とリタさんと同居されていたことから、お二人の貴重な写真を提示されながらの楽しいお話を披露されました。

会場は熱気に溢れ、100人に迫る聴衆はスコットランドを代表する伝統のタータンとウイスキーについての貴重な講演を楽しまれました。今後もスコットランドの文化の紹介に努めていきたいと改めて強く思いました。



上原尚也氏

竹鶴孝太郎氏による乾杯



ハギスを切り分ける
種子田敦子氏



コリン・マクラウド理事(中央) ドミニクス・スケルトン氏(右)



第3部 バーンズ・ナイト

スコットランドの国民的詩人ロバート・バーンズの誕生日である1月25日前後にスコットランド全国で開催される、バーンズナイトを第3部で80名以上の参加者を迎えてとりおこないました。

スコットランドデーに協賛いただいた、ブリティッシュ・カウンシル駐日代表のマシュー・ノウルズ氏、スコットランド国際開発庁カントリーヘッドでJSA大使のステイブ・ベイカー氏から開会のご挨拶を頂きました。

バグパイパーのドミニク・スケルトン氏が「パイピング・イン・ザ・ハギス」で先導し、スコティッシュキッチン講師の種子田敦子氏が日本中から必要な食材を集め伝統的レシピで調理した、大きなハギスを開場へ運び入れました。ルイス島出身の跡見学園女子大学助教教授、コリン・マクラウド氏がバーンズの詩「アドレス・トゥー・ア・ハギス」を演唱してハギスにナイフを入れ、乾杯。

参加者はお料理や歓談を楽しみつつ、スコティッシュハープで2018年にマーガレット王女記念賞を受賞した松岡莉子氏の清々しい演奏を鑑賞し、日英で数々の受賞歴を誇るスコティッシュ・カントリー・ダンサー、金子誠人氏の指導でケイリーを踊るなど、盛りだくさんのパーティーを満喫しました。

最後に抽選会で、JSAのロゴ入りアイテムや、JSA顧問のロキャロン日本代表の綱島実氏からのご寄与で、タータンストール等の賞品をラッキーな参加者が獲得し、笑いや歓声があがる中、盛況のうちにお開きとなりました。



マシュー・ノウルズ氏 & ステイブ・ベイカー氏



ドミニク・スケルトン氏バグパイプの先導で運び込まれるハギス



ケイリーダンスを楽しむ参加者たち



松岡莉子氏



賞品を手渡す綱島実氏



在エディンバラ日本国総領事 高岡望氏を領事館にお訪ねして



3月3日、Edinburghの領事館で高岡総領事とお会いして、日頃のJSAへのご協力に感謝を申し上げるとともに、当協会の日本での活動が奨学金の拡大を中心に益々活発になっていること、初めてのBurns Night が成功裏に終わったこと、Scotland支部が昨年秋にEdinburghに開設されたこと等を報告しました。高岡総領事からは、しばらく休止状態だったScotlandのJapan SocietyがEdinburgh大学のIan Gow名誉教授を中心に活動を開始したこと（幸いなことに私はStirling大学で教鞭をとられていたこともあるGow氏とは面識があります）、その他、Edinburghでの日本関連の行事を含めた最近の状況など伺うことができ、大変有意義な時を過ごさせていただきました。

「日本スコットランド交流協会高校生英語研修トンボ学生服奨学金」開始

2020年度から、日本スコットランド交流協会（JSA）は株式会社トンボ様の支援を受け、スコットランドにある英国国立スターリング大学の英語研修に参加する高校生への援助をするための奨学金を開始します。これまで、英語研修の奨学金は大学生を対象としたものが主でした。しかし、日本でも小学生から英語学習が開始され、早い時期から英語学習が始められることになるという状況下、大学生になるのを待たず、高校生が英語を母国語とする国で英語を学ぶ機会を得ること、そして、それを支援することは非常に大きな意義があると考えます。この奨学金の対象となるスターリング大学の英語研修コースは、一般的な語学学校のコースではなく、大学が直接運営している高校生対象のコースです。現在、スコットランドではスターリング大学だけが高校生コースを設けています。

スコットランドは、1697年世界で初めて義務教育を始め、今も「教育」をその柱としています。そのスコットランドにあるスターリング大学は、2016年から高校生を対象とする英語研修夏期3週間コースを開始し、1クラス15人以下の少人数クラスでの丁寧な指導で成果を上げています。自然に囲まれたU広大な大学は、UKはもとより、EUの中で最も美しいキャンパスといわれて、勉学にふさわしい環境です。そのキ

ャンパス内にある寮での生活も安全で快適です。本奨学金では株式会社トンボ様から全面的に援助をいただき、スターリング大学で夏期3週間コースに参加する高校生の中から12名に各5万円を給付することとなりました。高校生を対象とした支援の奨学金がまだまだ少ない中、今回、この奨学金を始められることは大変喜ばしいことだと思っています。（なお、当協会ではスコットランドの大学院で学ぶ日本人を対象にした奨学金は協会設立当初から続けましたが、こちらの奨学金もトンボ様の支援をいただき今年は対象者を従来の2名から4名に増やすことができました。）英語研修に参加の高校生の皆さんには是非、本奨学金に奮って応募いただきたいと思います。なお応募方法等の詳細に関してはJSAホームページをご覧ください。



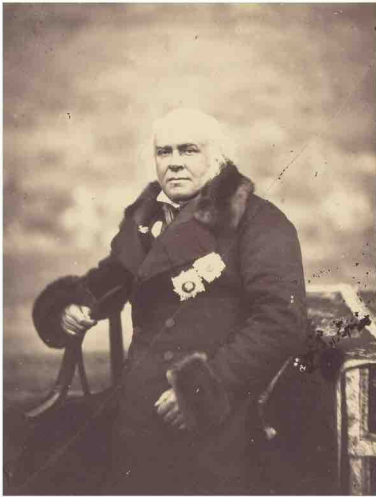
（株）トンボ社長 近藤氏・綱島氏・山本氏・関

帰朝報告会及びYear-End Party

12月14日、新宿三井クラブにて2019年度奨学生帰朝報告会及びYear-End Dinner Partyが開催されました。初めに、本年9月にスターリング大学の修士課程を修了し帰国された太田智美さんから、スターリング大学へ留学するに至った経緯や現地での研究の様子、そして今後に関してご報告がありました。会場には今後スコットランドへの留学を予定している方がおり、スコットランド留学へのバトンを上手く繋げたことと思います。後半の懇親会パートでは、参加者の方々と直接お話できただけでなく、スコットランド国際開発庁駐日代表 Stephen Baker氏からは素敵なスピーチを頂きました。本年も会員の皆さまや顧問の方々に支えられ、奨学金活動をしてこられたと実感できる素敵な会となりました。（小根山 茜）



Bruce 卿 (Lord Charles Bruce) のBroomhall House 訪問



1858年日英修好通商条約を締結
James Bruce, 8th Earl of Elgin

との関係の深さを初めて知ることとなりました。Bruce氏ご本人もJSAの活動に興味を示され、今後協力をしていきたいとのご意向でした。Bruce卿と日本の関係についてはDonald氏 (JournalistでHerald紙に多くの記事を書いていらっしゃいました) が素晴らしい記事を書いてくださいましたので、以下、お楽しみください。(関)

Mission accomplished: remembering Elgin in Japan

No-one who knows the leading role Scotland played in the British Empire will be surprised that a Scot signed Great Britain's first substantive treaty with Japan. More than 150 years of UK-Japanese relations, plus the special Japan-Scotland affinity that the JSA celebrates, all spring from a single source: The 1858 mission of James Bruce, 8th Earl of Elgin and 12th Earl of Kincardine (1811-1863) to Yokohama and Edo [Tokyo]

In her words it was an "enormous privilege" for the JSA's President Emeritus Prof Taeko Seki to visit Broomhall House in Fife, seat of the Earls of Elgin as a guest of Charles, Lord Bruce, the great x 3 grandson of the 8th Earl on 7 March 2020. The heir to the Earldom, Lord Bruce is a formidable historian of a family that traces its lineage back to King Robert the Bruce. Charles Bruce is a gracious and hugely knowledgeable host, very familiar with Japan. He has lectured on his ancestor in Kanagawa and Osaka and lent items from the family collection to an exhibition in Kanagawa in 2009.

Set on the banks of the Firth of Forth near Dunfermline in Fife, Broomhall House is a treasure-house of family and national history, containing several collections from Africa, North America South Asia and the Far East acquired principally as diplomatic gifts in 18th and 19th centuries. The house as it now stands was remodelled for the 7th Earl, best known for bringing the Elgin Marbles from Athens to London.

Broomhall also has a small private museum, which at the time of our visit was displaying items relating to James Bruce's trip to Japan, including exquisite lacquer boxes, brush writing equipment, a beautifully preserved man's kimono and a pipe, all gifts to Elgin's party from the Shogun's representatives. Some of the family's greatest treasures are the water-coloured sketches by the expedition's artist Captain Charles Bedwell RN, among the first images of Japan and the Japanese ever seen in the West. Other rarities include a book of Hokusai cartoons, a contemporary map of Edo and a group of cranes modelled in silver and bronze that may be an official gift from the short-lived boy Shogun Tokugawa Iemochi (1846-1866), or his soon-to-be-assassinated Regent (Tairō) Li Naosuke (1815-1860).

Elgin's mission, negotiating treaties with China and Japan, is described in vivid detail in Laurence Oliphant's Narrative of the

1314年、バナックバーンでのEnglandとの戦いに勝利しScotland独立後初の王となったKing Robert the Bruceの直系の子孫であるBruce卿のScotlandのFifeにある館「Broomhall House」に3月7日招待されました。私の長年の友人であるColin Donald氏 (JSAの会員でStirling在住) がLord Charles Bruce氏の友人であることからご紹介いただきました。荘厳な館には明治維新前後の日本関連の品々が展示され、日本

Earl of Elgin's Mission to China and Japan (1859), occurred during the well-travelled aristocrat's time as Queen Victoria's High Commissioner and Plenipotentiary. A capable professional diplomat and a high-minded man (he was an Oxford friend of Gladstone), Elgin was charged with 'opening' China and Japan for trade with the British Empire. His no-nonsense approach to the Chinese resulted in the destruction of the Qing Emperor's Summer Palace (as an alternative to bombarding Beijing) and the ceding of the Kowloon peninsula.

His private papers reveal Elgin as a fascinating Victorian figure: For all his effectiveness as an instrument of mid-19th Century 'gunboat diplomacy' the Dictionary of National Biography suggests he was "privately deeply troubled by Britain's aggressive policy" and "ambivalent about the British policy of forcing trade on the peoples of China and Japan".

Unlike in China, no violence was involved in the 'unequal' Anglo-Japanese Treaty of Amity and Commerce (日英修好通商条約, Nichi-Ei Shūkō Tsūshō Jōyaku). It was signed a month after the arrival of Elgin's four-ship flotilla on 26 August 1858 in the heat of the Japanese summer. The Shogunate, aware of the price of resistance to Western pressure, was prepared to offer European powers the same terms they had agreed with the US envoy Townsend Harris the previous month. The pact allowed representative of the British government to reside at Edo, opened Hakodate, Kanagawa and Nagasaki to British commerce and allowed British subjects could travel within a range of 25 miles of each port, and opened Edo and Osaka to British expats. While internal Japanese controversy about the 'Ansei treaties' led to civil strife and ultimately the Meiji Revolution of 1868, one beneficiary was an obscure 21-year-old fellow-countryman of Lord Elgin's called Thomas Glover who arrived in Nagasaki the following year.

The rest, as they say, is history. The JSA is hugely grateful to Lord Bruce for showing us how the two sides in the relationship between our island nations first appeared to each other.

(Colin Donald)



展示の日本の品々

Broomhall House前で
Donald氏と



Ms Bryson · 関 · Lord Charles Bruce

The Queen's Anniversary Prizes のReceptionに出席して



クイーンズアニバーサリープライズは、英国の大学が様々な分野で、その卓越性、革新性、公共の利益への貢献を成し遂げたことを称える賞です。今年にはスターリング大学が50年にわたる水産学への貢献（海洋生物の保護育成、養殖技術を通しての持続的な食糧確保など）に対してチャールズ皇太子から表彰を受けました。バッキンガム宮殿での授与式には Gerry McCormack 学長をはじめJSAの海外会員一号の渉外局長 Kerry Bryson氏ら5人が出席、私はその後の国会の上院（House of Lords）で行われた受賞記念レセプションに招かれました。厳重な警備を通り荘厳な上院の建物の中でのレセプションは生涯忘れがたい思い出となりました。（関）

Royal honour for the University of Stirling

The Duke and Duchess of Cornwall have bestowed the UK's highest academic honour - the Queen's Anniversary Prize - upon the University of Stirling's Institute of Aquaculture. The royal couple presented the Queen's Anniversary Prize to the Principal and Vice-Chancellor, Professor Gerry McCormack, and the Head of Aquaculture, Professor Selina Stead, at a special ceremony at Buckingham Palace on 20 February 2020.

The Queen's Anniversary Prize was established by Her Majesty The Queen in 1992 to mark the 40th anniversary of her accession. The Prize is part of the UK honours system and is the highest national honour awarded to further and higher education. It recognises outstanding work that shows quality and innovation, and delivers real benefit to the wider world through research, education and training. The award acknowledges the dedication of the team in the Institute, and within the wider University.

The University of Stirling is home to one of the world's largest aquaculture centres and is responsible for the UK's reputation as a global leader in the sector. The Queen's Anniversary Prize celebrates the pioneering innovations and research impact of the Institute in one of the world's fastest-growing food production sectors in a bid to tackle global hunger. Experts at the Institute are finding solutions to the "world biggest challenges" including sustainable food production, fish farming and the support of water-based food projects overseas. They have an international reputation for teaching, research, technological innovation and consultancy within the sector. This reflects years of collaborative and interdisciplinary work with governments, regulatory bodies, industry, fish farmers and supply chains around the world.

What will our food look like in the future? Right now there is a biodiversity emergency and our blue planet needs new solutions to keep it healthy. Aquaculture offers the best solution for providing safe nutritious food in many parts of the world. Furthermore, using aquaculture as a conservation tool to enhance biodiversity may be the only option to repair some parts of our blue planet. The Institute provides world leading scientific evidence to help



チャールズ皇太子・McCormack学長

スターリング大学長・Bryson氏・関

build a world without hunger and create sustainable livelihoods and environmentally-friendly industries. Knowing what type of aquaculture will be most resilient to future climate change and other natural and human-induced impacts is critical for healthy aquatic environments and food. As the world population continues to increase, Stirling experts are at the forefront of developing solutions for tomorrow's food.

After the ceremony and reception at Buckingham Palace, the University's Chancellor, Lord Jack McConnell of Glenscorrodale, hosted a splendid reception in the Churchill Room at the House of Lords for VIP guests, many from the aquaculture sector, and also for alumni and supporters living in London. It was a wonderful occasion and everyone who attended was very proud of the University for both winning this prestigious prize, and also with its vision for the next 10 years, demonstrating how aquaculture can help meet ALL of the United Nations Sustainable Development Goals. There was a lot of goodwill in the room to help the University through direct support, networking and influence to ensure that it can fulfil its ambitious plans for the future. Next year the Institute will mark its 40th anniversary and is planning a major redevelopment of its facilities, ensuring the journey for success continues.

For more information contact Kerry at directoradvancement@stir.ac.uk or philanthropy@stir.ac.uk

(Kerry Bryson)

「日英共同プロジェクト： 認知症Conference」 スターリング大学で開催



2015年から始まった日英共同プロジェクト「高齢者と認知症のための環境デザイン」のConferenceがスターリング大学で行われ、3日間のWorkshopの後、2月18日に「Finding a Common Language: Designing for Ageing and Dementia in Japan & UK」のタイトルで、公開講座が開催され、基調講演を担当しました。日本・UKの共同研究ですが、中心になっているのは、認知症の人々の住環境を中心としたデザインで世界に知られているスターリング大学、東京都健康長寿センター、慶応大学、静岡大学、日本医療政策機構などの組織です。私の講演に引き続き、スターリング大学からAlison Bowes 教授がこれまでの研究成果と今後について講演、続いて実際に認知症の人々にやさしい住宅の設計で成果を上げている建築家Lesley Palmer氏の講演が行われました。

当日、80席の会場は満席となり、人々の関心の高さがうかがわれました。次回は東京でConference が開催されます。

詳細が決まり次第、会員の皆様にお知らせしますので、是非ご参加ください。因みにJSAはこの共同研究の後援団体に名を連ねています。

(関)



プロジェクトのResearchers

A new age of exploration By Matthew Knowles, Director, British Council Japan

I've lived in some of the world's great cities - London, New York, Shanghai and Tokyo among them - but in my heart pride of place must go to Edinburgh. I went there as a student, knowing nobody, and stayed for ten happy years. It was in Edinburgh that I met and married Catherine and we recently returned there for a significant birthday, to celebrate with wonderful friends.

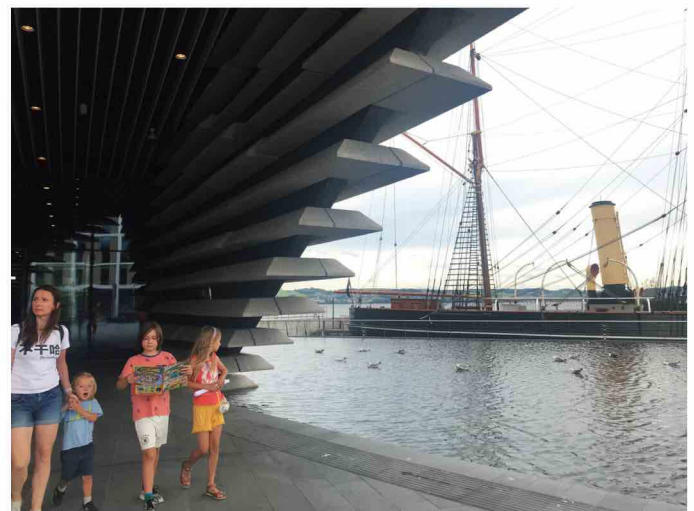
Catherine hails from Dundee, which is known around the world for marmalade, jute and The Beano. When I first visited, in 2002, I was surprised to find Captain Scott's ship Discovery laid up in a dry dock. Surprised and, I have to say, a little dismayed, because this famous and proud vessel was stranded in the undistinguished company of a drab leisure centre, a tired multi-storey carpark and an ugly hotel. That was then - but much has happened since.

On arriving in Japan, one of the first visitors I welcomed from the UK was Lori Anderson, the Director of Creative Dundee. She came to meet fellow creative entrepreneurs and city officials, following the signing of a joint declaration between Scotland and Yokohama.

Creative Dundee has been engaged in a twenty-year, £1bn project to transform the Waterfront of Dundee. The city council embraced a vision which enlisted the arts and creative industries to reshape the city and reimagine its public spaces. The resulting regeneration of the environment and revival of the community (to say nothing of the influx of visitors) have won international recognition and acclaim.

By working to broker and support cultural exchange, the British Council is helping artists and arts professionals to learn from each other's experience, and we are harnessing the arts to champion diversity and inclusion in our societies.

The stunning centrepiece of Dundee's Waterside is an iconic new V&A museum, designed by Japan's own Kengo Kuma. I have to say it provides fitting company for Scott's great ship, which



ノウエルズ氏のご家族とV&A museum

stands nearby. We visited the museum as a family last summer; its design wonderfully evocative of Japanese architecture yet positioned like cliffs on the banks of the River Tay. This is Kuma's first commission in the UK: 'a conversation', he says, 'between nature and artefact.'

On the museum approach, Kuma has contrived shallow stretches of water which, as you look towards Discovery, give the impression that the vessel is once again preparing to sail. It's an image that has sprung from a brilliant creative mind. For us, it speaks of a new age of exploration on which the UK and Japan are embarking together. Such a voyage will draw on our common values and seek to address our common challenges. Bon voyage! May we make many beneficial discoveries and be rewarded by the joy of enterprise and the blessing of friendship.

Japan Series 2020

なないろ駅伝について

スターリング大学の『Japan Series 2020』の一環として、3月8日に『なないろ駅伝』が開催されました。大学でスポーツマネジメントを学ぶ修士課程の学生たちが中心となって企画を運営。国や文化、障がいの有無、年齢や性別関係なしにチームを作り、タスキをつないでいく……そんな『なないろ駅伝』を2016年に最初に実施した筑波大学や、地元のスポーツ団体なども連携し、イベントは見事に成功を取りました。『なないろ駅伝』はこれが欧州初開催。スターリングに留学中の日本人学生の多くもランナー・ボランティアとして参加し、当日の盛り上げに一役買ってくれていました。以下、そんな学生たちの声をお届けします。(石川教子)

3月8日曜日、風は強くも太陽が出て日向は暖かい日、なないろ駅伝はリレーの準備としてウォーミングアップから始まりました。音楽と共に柔軟を行ったのは日本のラジオ体操と似通うところだと思います。駅伝は11人が同時に走り、グラウンドを1周した走者が同じグループの次の走者にタスキを渡すというルールです。年齢や性別は分けられておらずランダムで、小さい子供も走っていました。走者の中には漢字が書かれたTシャツを着ている人や、キルトを履いている人もいて、異文化交流らしくて良いと思いました。走っている間は周りの人が応援をしたり、走者も手を振ったりと、皆楽しんでいる雰囲気でした。

一時間、タスキを渡しつつ全グループが走り続け、最後の走者が拍手で迎え入れられました。どのグループも止まることなく1時間タスキを渡し続ける事が出来て、イベントの主旨に合ったリレーになったと思います。(大妻女子大学 佐藤葉月)

トラックで駅伝競技が行われる横には、いくつかのワークショップと飲食スペースが設けられていました。ワークショップでは折り紙の体験、だるまの色塗りなどが行われており、飲食スペースでは巻き寿司やかりんとうなどのお菓子が食べられました。お菓子は箸でつまんで食べる形式でしたが、皆さん苦戦しながらもとても上手に食べていました。

競技終了後、琴の演奏があり、それからいくつかのグループに分かれてスポーツゲームをしました。クリケットやアーチェリーのほかに、スコットランドのハイランド地方の伝統ゲームの「ハイランドゲームス」も行われていました。木の幹のような太くて長い棒を持ち上げて投げるゲームで、今回は女性もいたため比較的細い棒でしたが、身長のご二倍ほどはありそうな棒を持ち上げてバランスをとるのはとても難しかったです。今回のイベントはとても盛況で楽しかったです。参加できてよかったです。(跡見学園女子大学 長谷川美咲)

私は今年のなないろ駅伝において、現地の方に日本語の挨拶やお辞儀の仕方を教える大変貴重な体験をさせていただきました。日本の文化や言葉を国外の方に教えることが初めてだったので、最初は異なる習慣や考え方を持つ方々にとって、それらはとても奇妙に映るのではと思っていました。しかしクラスを始めると、参加して下さったご家族はとても楽しそうに私や私のアシスタントの話を聞いてくれました。「ありがとう」や「おはよう」といった表現はすでに知っていた一方で、「初めまして」や「よろしくお願ひします」という表現は、意味や発音が難しかったようです。今回のクラスを通して、我々が常日頃何気なく口にしてしている表現の意味、そもそもなぜこのような表現が



生まれたのかなど深く考えさせられました。

また、チームで1つの襷をつなぎ共に汗をかいた後に聴いた関先生の琴は素晴らしかったです。優雅でやわらかい音色が自然と私の体を癒してくれた気がしました。

(早稲田大学大学院 教育学研究科 修士1年 大藤貢一)



Braeden, Jamie, Katrin (スポーツマネジメント大学院生)

Growing together through the Nanairo

Having been able to organize Europe's first 'Nanairo Ekiden' with great success here at Scotland's arguably most beautiful campus is filling us with pride and we are grateful for the experience gained and the connections we made while we were going through the different stages of this event.

We, that is the group of Brady, Jamie, Jack, Femke and Katrin: 5 sport management students of the University of Stirling's MSc Sport Management programme. We all started studying here last September and first heard about this event in October, leaving us with little time to prepare. To be fair, had we known the scale of this event- we maybe would have thought that organising an event with such a strong message and impact would be way over our humble student heads. However, as we all love sports, we could quickly relate to the

message of 'Nanairo' and consequently, as the workload and possible difficulties of this project became apparent, we decided that we would not back out, but carry on and try our best to make this event a success.

The next months were very busy. We worked on skills and manifold fronts which we had never worked on before: on top of our normal coursework, we had to book venues, raise money, figure out whom to contact when and how, schedule meetings with possibly helpful organisations, departments and individuals, prepare a presentation at the Scottish parliament, build up a solid internal and external reputation, manage time, equipment and money efficiently, come up with a vision for the event and a marketing plan, put both into action while also bringing together volunteers and participants and not forgetting to match expectations from our peers in Japan, Stirling and on the social media platforms we had to set up- to name just a few.

What really helped us was the network of people we were building up as we went- especially through our internships (another part of our course), as none of us is local to Stirling and we therefore initially did not know many people.

In retrospect, if we were to highlight one thing we learned, it is that as a group, we can reach so much more than all of us could individually!

Throughout the process of organising this event, everyone's strengths became apparent and everyone took responsibility for certain parts of the workload that suited those skills, enabling us to overcome those times when the pressure seemed too much to take. We can now confidently say that we mastered the art of true groupwork and that we became more than just group members: We found friends in each other and grew together.

And for this, we want to thank everyone who accompanied and



helped us on our journey.

As there are too many to name, we apologize beforehand for everyone we cannot mention here. Yet we send special thanks to Kerry Bryson, the Japanese exchange students and Dr. Taeko Seki for their help.

You will always be in our hearts! (Katrin Loose)

Scotland からの来訪者たち



作家、詩人、劇作家として知られ、さまざまな賞を受賞しアバディーン大学の名誉教授でもある Alan Spence 氏が昨年12月15日に夫人を伴ってJSAの本部を訪れました。日本文化、歴史にも造詣が深く、「The Pure Land」(2006年)は江戸から明治にかけての激動期の日本を実在のトマス・グラバー氏を主人公に据えて書き上げた小説です。「Night Boat」(2013年)では雪舟を取り上げています。The Timesの書評では「The Pure Land」が「Spence evokes the trading was and movement of the century with historic verisimilitude」と評され、さらに「Night Boat」については「Rich in historical details, and the drama of the battle between a man's inner and outer lives」と書かれています。どちらもCanongate Booksから出版されています。今回の来日目的は取材ということですので、新作の出版が待たれます。

英国歌曲展に行ってきました!



テノール歌手の辻裕久氏と作曲家でピアニストのなかにしあかねさんによる英国歌曲のクリスマス・コンサートに行ってきました。23回目ということでしたが、来年のオリンピック・イヤーを間近に控えた豊洲では初めての開催でした。英国歌曲のクリスマス・キャロルをたくさん楽しむことができました。クリスマス・キャロルとしてまず第一に頭に浮かぶ方も多い、「Deck the Hall」(ひいらぎ飾ろう)の歌詞はスコットランド出身のThomas Oliphant (1799-1873)だと知り、そのシンプルで軽快なリズムになるほどと思いました。スコットランドの文化の一つとして歌い継がれてきた歌は、スコットランドを知る上でとても直接的に伝わりやすいものだと思えました。これからも音楽のつながりを積極的に日本スコットランド交流協会としての活動に取り入れていきたいです。(齊藤 史帆)



Teatime English (英会話)



日時:2月8日
午後4時～5時半 場所:JSA
東京本部 / 講師は、先日の
Scotland DAY 2020でバグパイ
ブを吹いてくださったドミニク・
スケルトン先生。南アフリカ共
和国のご出身でおばあさまがス
コットランドの方という事で、10代の頃からバグパイブを習って楽隊など
で吹いてらっしゃったそうです。

参加された方々は皆さんスコットランドへ行かれた事のある方が多かつたため、スコットランドについて詳しい方が多かったです。今年またスコットランドへ行かれる予定がある方も、そうでない方も様々でしたが、どこへ行って何をしたい、またその理由などの会話や、先生と文法の質疑応答などを行いました。

第18回 スコティッシュキッチン



12月14日土曜日東京本部のある目白に7人が集まり、第18回スコティッシュキッチンが開かれました。講師は種子田敦子さんです。クリスマス料理ということで、メインのローストチキンは、事前準備をしておけば、食べる時間に合わせて焼くだけ、パーティーに最適です。

この料理のツボは前日からセロリ等を丸鶏のお腹に詰め、外皮だけでなくお腹にもしっかり塩をふって味をつけておくこと。そして、焼くときはベーコンを丸鶏の上に敷き詰め、低温(200℃)で時間をかけて焼くことです。デザートはクリスマスプディングやミンスミートパイは、レーズンやブランデーを使ったとても日持ちのするお菓子です。その他、手の込んだ前菜のアスピック等々とても美味しくいただきました。



宮崎公立大学では、9名の学生が協定校のスターリング大学の夏季語学研修に参加しました。先生方やキアラさん、そして地元の人や他国からの学生と英語でコミュニケーションを取れたことが何より楽しい思い出になったようです。エディンバラ、グラスゴーのような歴史的都市を訪れ、異文化を肌で感じる事ができたことも学生たちにとって大きな財産になったと思います。また、6月には昨年度語学研修に参加した2名の学生が、宮崎青年会議所主催の国際イベント「ひなた超(てげ)フェス2019」に参加し、宮崎日英協会の催し物の一環として留学体験を発表しました。今後も本学学生のスターリングでの経験を、市民の方々に発信したいと思っています。

(宮崎公立大学助教 村上幸太郎)



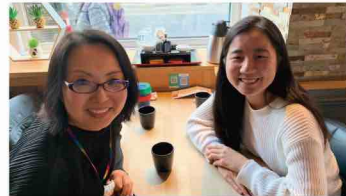
奨学生の榎本政之氏

10月27日、今年度の奨学金受賞者の1人でグラスゴー大学大学院のMBAプログラムに在学中の榎本政之氏にお会いしてお話をうかがいました。活気あるグラスゴーでの毎日や、英語で暮らし授業を受けることでの苦労や学びの楽しさ、またご趣味の弓道ではプレストウィックにある弓道同好会に参加なさっていることなどをお話くださり、充実した学生生活をおくっていらっしゃるこ



とがわかりました。

奨学生の北村望さん



12月17日に、今年度のJSA奨学生の一人でスターリング大学大学院にいらっしゃる北村望さんとエディンバラでお会いしてお話をうかがいました。

勉学に集中するに相応しいスターリング大の緑の多い落ち着いた環境で、国際色豊かなクラスメートやルームメートと支えあいながら、研究に打ち込んでいらっしゃるご様子。年末年始は日本に帰らず、ロンドンでの観劇やご旅行をなさるとのこと、充実した暮らしぶりでも頼もしく感じました。

天皇誕生日祝賀パーティー



2月20日、エディンバラ市ジョージストリートにある The Assembly Roomsにて、エディンバラ日本総領事主催の天皇誕生日祝賀パーティーが開催され、日本スコットランド交流協会理事として松原も招待を受けました。スコットランド議会議員、大学関係者、日本企業会などの関係者を交えた500人ほどの来賓は National Dress/Lounge Suitのドレスコードに従い着物・キルトなどで出席し、握り寿司や巻き寿司をいただきながら歓談を楽しみました。



キルトなどで出席し、握り寿司や巻き寿司をいただきながら歓談を楽しみました。

能イベント

JSA会員、能楽師の武田宗典氏が、11月10日にエディンバラ大学での能公演とワークショップに出演なさいました。第1部では能面と感情を表す型の解説の後、観客全員が舞の型と謡の声出し。一気に能の世界に引き込まれました。次に能装束の試着希望者と武田氏とで日本式ジャンケン大会となって盛り上がりました。第2部は観客全員で刀で戦う型の練習からスタート。木刀を使った実演に大人も子供も大喜び。また、現代の言動を能で表現するコーナーでは、「応援していたラグビーチームが負けた時」などのリクエストが優雅な動きや美しい扇使いで表現され、2時間があっという間に感じる程楽しく興味深い構成で、能のファンが増えたに違いありません。



会員紹介

松岡 莉子さん



スコットランドでの3年半の音楽留学を終え、昨年秋に日本へ帰国しました。帰国後、スコットランドでの生活を恋しく想う日々を過ごしていたところJSAと出会い、この度入会させていただきました。留学中は英国王立スコットランド音楽院の修士課程においてスコットランド伝統音楽を専攻し、伝統楽器であるハーブ(Clarsach)を学んでいました。寝食を忘れるほど伝統音楽に没頭した留学生活はこれまでの人生で最も幸せな時間でした。音楽を通して仲間と笑い合った日々は、かけがえのない大切な思い出です。当初はハーブと身一つでスコットランドへ渡った為、頼れる人もおらず苦労もありましたが、ハーブの先生探しから始め、大学院を受験し、現地で出会った人々に助けられながら一歩ずつ前へ進むことが出来ました。2018年には、スカイ島で開かれた伝統音楽コンクールで優勝させて頂くなどアジア人として初めての功績を残すことが出来ました。まだまだ未熟者の私ですが、音楽を通して日本とスコットランドの懸け橋になれるよう邁進していきたいと思っています。

JSAタータンのスカーフ販売のお知らせ



ロキャロン社日本代表でJSAの顧問も務めていただいている綱島実氏の協力で、昨年JSAタータンの登録、そのタータンを使ってバッグとポーチ、ネクタイを製作・販売を行うことができました。バッグとポーチは完売、ネクタイは現在「キャロン国」でインターネット販売中です。この度は、大判スカーフ55枚の販売のお知らせです。縦194cm、横70cm、素材は100% pure new woolのロキャロン社製で、1年を通じて使用できる素材で作りました。一枚8000円の特別価格で販売です。ご希望の方は、JSA (e-mail: info@jpn-scot.org か tel:03-5877-8785) にお申し込みください。ロキャロン社は毎年、日本での展示会に参加しています。写真は2019年10月15日に渋谷で開催されたヨーロッパアンテキスタイルショーに参加した時のものです。

「スターリング大学夏期英語研修」(大学・一般コース/高校生コース) 参加者募集

UNIVERSITY of STIRLING



英語コースで英語の習得を目指したい方、どうぞご参加ください! EUで最も美しいと言われるスターリング大学へ短期留学してみませんか? Campus内のGolf Course、Swimming Pool、テニスコートなどスポーツ設備も充実しています。16歳以上であればどなたでもご参加頂けます。

*英語コース: 上級、中級、初級とレベルに併せて参加できるため、英語能力は問いません。

*寮: すべて個室で、各部屋バス・トイレ付、キッチン共有で自炊です。

*期間・費用: 大学・一般コース: 4週間(8月3日~8月28日) £ 2,895

高校生コース: 3週間(8月3日~8月21日) £ 2,195

*学費、寮費、週末旅行(ネス湖1泊も含め)、その他のEVENT代すべて含まれます。

*Flight代と食事(自炊で、1週間3食で5,000円~6,000円程)は別途支払いが必要です。

◎カリキュラムには、週末のエディンバラ・グラスゴー(一日)観光、ネス湖(一泊)旅行、スコットランドダンスパーティー等も含まれています。

ご興味のある方は気軽に連絡ください。会員のご家族、ご友人方もご参加いただけます。

2~3週間の参加も可能です。お問合せ=関 妙子(Stirling University, Honorary Doctor)

〒161-0033 新宿区下落合3-12-28-1401 Tel/Fax: 03-5988-8785

携帯: 090-7192-4650 E-mail: taeko.seki@gmail.com 締切: 5月末

ご寄付ありがとうございました
運営費として大切にさせていただきます

ロキャロン社様78,000円/佐藤史郎様10,000円/太田智美様6000円/匿名3000円

編集後記

昨年より松原理事がScotlandにお住まいになりJSA Scotland支部として活動いただいています。今回号にも4本の活動記事を掲載いたしました。今まで以上にScotlandでのJSAの活動がタイムリーにお伝えできることと思います。今後の活動にご期待ください。(飯村)



NPO 法人

日本スコットランド交流協会

The Japan Scotland Association



☆本文編集協力

☆東京: 関 妙子/飯村 英人/光 恵子/小根山 茜/齊藤史帆

☆関西: 香川 久生 ☆九州: 前原 正人

☆Scotland: 松原衣理 / Kerry Bryson / Colin Donald

☆Stirling: 石川 教子 ☆制作: ノーマデザイン 野間 忠博

東京本部 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-28-1401 Tokyo Headquarters 3-12-28-1401 Shimo-ochiai, Shinjuku-ku, Tokyo 161-0033, JAPAN

関西支部 〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町2-5-3-906 Kansai Branch 2-5-3-906 Shin-senri, Higashi-machi, Toyonaka-shi, Osaka 560-0082, JAPAN

九州支部 〒880-0032 宮崎県宮崎市霧島2-23-2 Kyushu Branch 2-23-2 Kirishima, Miyazaki-shi, Miyazaki 880-0032, JAPAN

東北支部 〒030-0196 東京都青森県青森市合子沢山崎153-4 青森公立大学 香取真理研究室

Tohoku Branch Prof Mari Katori's office, Aomori public University, 153-4 Yamazaki, Goshizawa, Aomori-shi, Aomori 030-0196, JAPAN

Scotland支部 12 Dryden Place, Edinburgh EH9 1RP, UK (e-mail: EdinburghJSA@gmail.com)